

ついに代理出産の波が日本にも押し寄せてきました。出産前の女性

性が、子宮がんや卵巣がんに罹患し、子供を生むことができなくなることが身近な問題となってきたことも一つの要因になってきているように思います。

二十年前、女性のがんと適齢期は五十歳過ぎと言われていました。今では三十代の女性が発症適齢期という現状から、妊娠出産というファクターにも目を向ける必要はなくなりました。

こうした現状からも、予防医学に対する認識理解を進める必要があると私は思います。

予防医学を確立するためには、人はなぜ罹患するのか、あるいは健康者との違いはどこにあるのか、病理組織以外の研究にも取り組む姿勢が大切です。具体的には、食生活の乱れから就寝時間の遅れ、あるいはストレス

との関わりなど重要な課題が山積しています。私は、過去二十年間で一万人以上の罹患者を対象にストレスとの関わりを確認してきましたが、ほとんど全ての方が思い当たるそうです。中には安全な食材を選択し、運動療法も行って予防してきたが本意にも発症したという方もみえます。残念ながらストレスに対する認識が低かったのかもしれません。



自然医学総合研究所所長

大沼 四郎

自然治癒を科学する



「乳酸デヒドロゲナーゼ」という還元酵素の働きによって、お腹の真ん中にある

がんの盲点⑩

乳酸から糖に戻ります。これを恒常性と呼びますが、過剰なストレスは、恒常性を上回り、乳酸をつくり続け、腹部の内臓も硬直する。その結果として、血液や他の体液も酸化し、初期には、過労状態から満身創痍の状態となり、さらに、進行すること、自立神経や知覚神経が麻痺をして「自覚症状がない」状態になるのです。

も東洋医学にもこの考へ方が存在せず、がんは「突然変異によって増殖する」という見方が主流になったと考えられます。従って、血液を健康な状態に保ち、骨格の歪みを直すことで、回復するケースもあるといわれています。

次に、卵巣がんと歪みについて症例を紹介いたします。愛知県在住の女性(56歳)は、平成十七年八月に卵巣がんで腹水が貯留し、両側の卵巣と付随する臓器を摘出したが、十八年調症、冷え、頻回排尿、掲載します。

講演会のお知らせ

講師：大沼四郎 自然医学総合研究所所長 ナチュラルケアセンター院長 平成11年度社会文化功労賞受賞 生化学博士・名誉医学博士
開催日：11月18日(土) 名古屋市東区ウィルあいち2F 特別会議室 入場無料
テーマ：がんの盲点(11)「歪みと発病・血管年齢と病理」
時間：午後6時開場
主催：民間非営利団体 国際自然免疫学会
共催：自然医学総合研究所
申し込み：自然医学総合研究所 TEL 052・801・7063 まで
特典：先着50名様に解毒療法の割引券を贈呈

問い合わせ 電話 052・801・7063 Eメール shiro@nrt.ne.jp URL http://www.nrt.ne.jp